

キャリア開発学科における編入学支援システム構築に関する中間報告

石橋 慶一 岩田 京子 岸川 公紀 中川 敬基
中島 千優 島 弘美

An Interim Report on the Supporting System for Students Transferring to a Four-Year University

Keiichi Ishibashi Kyoko Iwata Kouki Kishikawa Yoshiki Nakagawa
Chihiro Nakashima Hiromi Shima

(2020年11月25日受理)

1. はじめに

令和元年度学校基本調査(確定値)(文部科学省 2019)によると大学・短期大学の進学率は、58.1%となり前年度より0.2ポイント上昇し、過去最高となった。しかし、短期大学学生数は、平成に入ってから過去最少となった。

高等教育への進学率が50%を超えるユニバーサル段階に移行した中で、学生の多様化が進んでおり、キャリア開発学科(以下、本学科)でも学生の多様化への対応が求められている。学生の多様化のひとつとして、4年制大学への編入学を目的に短期大学に入学してくる学生の存在もある。実際に、本学科では平成31年度入学の編入学希望の学生は8名であったが、本学科でも編入学に対応しているということを学校案内などで明確にすると、令和2年度入学の学生は入学時の希望調査では17名で、最終の希望調査である7月7日の段階では32名が編入学を希望しており、入学者数143名に対して全体の22.4%に当たる。希望者は確実に増加している。

これまでは希望者に編入学支援委員と各ゼミ担当による個別の指導を行っていた。しかし、編入学の希望者が増加するにあたって、編入学支援システムの構築が必要となった。このような現状を踏まえ、本学科では、今後増加が予想される編入学希望者に対し、本格的に

編入学支援の仕組みを作ることにした。

筆者らは令和2年4月より1年間の中村学園大学・中村学園大学短期大学部「教育改革支援制度」の採択を受けて、実際に編入学支援システムの構築を進めているが、本稿では編入学支援の現状と前学期までのまとめとして、中間報告を行うこととする。

2. 本学科における編入学の現状

ここでは、過去5年間における本学科を卒業後4年制大学へ編入学した実績及びこれまでの本学科の編入学への取り組みについて述べてみたい。なお、定員は平成28年度入学者までは、150名であるが、平成29年度より120名となっている。

(1) 過去の進学実績

本学科の平成27年から平成31年までの進学実績は表1のとおりである。主に経済学や商学系の学部へ進学しているが、中村学園大学流通科学部への進学が多い。

執筆者紹介：中村学園大学短期大学部キャリア開発学科
別刷請求先：石橋慶一，〒814-0198 福岡県福岡市城南区別府5-7-1 ishibashi@nakamura-u.ac.jp

表 1 過去 5 年間の進学実績¹

編入学年度	人数	進学先
平成 27 年度	4	中村学園大学 (流通科学部) (2) 広島大学 (経済学部) (1) 福岡女学院大学 (人文学部) (1)
平成 28 年度	3	中村学園大学 (流通科学部) (3)
平成 29 年度	2	中村学園大学 (流通科学部) (2)
平成 30 年度	4	中村学園大学 (流通科学部) (4)
平成 31 年度 (令和元年度)	2	中村学園大学 (流通科学部) (2)

(2) これまでの学科での取り組み

平成 27 年度から平成 31 年度 (令和元年度) までの 5 年間に於いて、編入学をした学生数 (実数) は表 1 に示している。入学者数に占める編入学者数は年度平均では 1.82% (実数 3.0 名) と決して多くなかった。その間の学科での取り組みは、学科内において編入学対策委員会を組織し、小論文の基礎を本学のラーニングサポートセンターに依頼し、小論文に関する専門的知識、過去問の指導は、本学科のビジネス分野の教員が担当していた。さらに、面接指導を編入学対策委員が実施をし、受験をさせていた。しかし、今後の希望者の増加 (平成 31 年度 8 名、令和 2 年度 17 名) を鑑みると、今まで以上に組織的及び計画的に指導していく必要があると考えられる。なお、令和 2 年度入学者で編入学を希望している学生は 17 名で、全入学者数の 6.05% になっている。令和 2 年度入学生は最新の 7 月 2 日～7 月 7 日調査では 32 名が編入学を希望している。

3. 編入学支援のための取り組み (前学期まで)

令和 2 年度前学期における編入学支援のための取り組みについて、編入学支援ルームを中心としたハードの整備と、編入学クラスの設定、編入学対策科目の設定、他学科と連携などのソフト対策の 2 つの視点からまとめる。

(1) 編入学支援ルームの整備

まずはハードの整備として編入学支援ルームを東 2 号館 2 階に設置した。この場所は以

前キャリアサポート室として使われていたが、同室を東 2 号館 4 階の情報準備室に移動し、この部屋を整備した。整備の内容は表 2 のとおりである。

机や本棚などは新たに購入した。机や参考書の購入は、「教育改革支援制度」の予算により整備した。

編入学関係の資料を連携推進部から編入学支援ルームに移動させた。それは学生が編入学の資料を探すときに、一元的に編入学支援ルームにあった方がわかりやすく、利便性が高いからである。しかし、編入学に関する重要な資料 (願書や推薦状の原紙など) は紛失をさけるため従来通り連携推進部が保管することとした。

学生に快適に利用してもらうためのルールを掲示し、さらにパンフレットのファイリングを行い、編入学支援ルームの資料の整理も行った。

表 2 整備の概要

状態	整備内容
新規設置	<ul style="list-style-type: none"> ・机 ・本棚 ・ホワイトボード ・TOEIC のテキスト ・大学情報収集のための PC ・観葉植物
連携推進部から移動	<ul style="list-style-type: none"> ・大学パンフレット ・受験報告書
整理実施	<ul style="list-style-type: none"> ・大学案内パンフレットのファイリング ・検定情報ポスター掲示 ・施設利用ルールの掲示

(2) 編入学クラスの設定

前述したように過去 5 年間の編入学実績は、2～4 名であり、進学希望者に対する指導は、各ゼミの指導教員と編入学支援員が、ゼミや授業のほかに、小論文対策等を行い個別に対応していた。

今年度についても、編入学希望者への指導方法を検討するため、まず対面授業開始後の 5 月 27 日～5 月 31 日に本学の大学向け統合型 WEB サービスシステムである UNIVERSAL PASSPORT (以下 UNIPA) でアンケートを実施し、「4 年制大学への編入学を希望するか」を確認したところ、17 名の学生が希望すると回答し、

¹ 進学先の () 内の数字は編入学者数を示している。

21名の学生が未定と回答した。昨年度実施したアンケート（2019年4月25日実施）と比較すると、希望者は、5名から約3倍に増加、未定者²も12名から約2倍に増加した。この増加要因は2つ考えられる。

1つ目の要因は、令和2年度入学から、学内を含めた編入学支援を充実させることを謳っており、高校の進路指導の中でも、編入学が可能な短期大学として、キャリア開発学科を薦められていたことにある。入学当初4年制大学への編入学を希望した17名のほとんどは、前述したような学生である。

2つ目は、コロナ禍による社会経済情勢への不安である。高校卒よりも良い就職先を目指して短期大学部へ進学を希望してきた中で、短期的に就職難の時代が訪れることが予想されるため、卒業年次を2年延ばした方が良いのではないかという心理が働いたものと思われる。このような学生は、4年制大学への編入学を未定とした学生に多くみられ、編入学希望の質問と同時に聞いた進学先について、具体的な大学名や学部名を記載していない、もしくは誤った学部名を記載している場合も多い。

上記のような状況から、今年度は、ゼミの指導教員を中心とした、個別対応により編入学を支援することは、難しいことが予想され、協議の結果、編入学希望者を集めたゼミを設定することとした。

編入学ゼミ数については、希望者と未定者を合わせて30名強いたため、2ゼミとするか3ゼミとするかが確定できず、まずは編入学希望の学生数を正確に把握する必要があった。そのためゼミ選択の際、編入学希望者は、就職希望者よりも先に意思を示すよう指示し、7月2日～7月7日にかけて行った希望アンケートで、32名が編入学ゼミを希望し、最終的に本学科全7ゼミのうち、2ゼミを編入学ゼミとした。

(3) 編入学対策科目の設定

本学科の学生が目指す編入学先は、主に経営学部や商学部等の社会科学系がターゲットとなる。平成27年度に広島大学への編入学者がいるが、令和2年度入学者の希望編入学先としても最も多いのは、中村学園大学流通科学部であり、上記以外にも九州産業大学地域

共創学部や福岡大学商学部等を希望する学生もいる。また、キャリア開発学科の学生が希望する編入学先の立地は、主に福岡市内がほとんどであり、県外を希望する学生はほとんどいない。

上記のような学生の希望を基に、中村学園大学周辺の4年制大学の編入学試験科目を調べた結果、各ゼミの編入学対策科目を下記の通り設定した。

まず国公立を目指す学生については、基礎学力の向上が不可欠であり、特に英語対策が必須である。そのため編入学ゼミのうち1ゼミを英語対策クラスとした。また編入学試験の専門科目対策に必要な指導は、専門知識の獲得と小論文対策である。このうち専門知識については、目指す大学や学部によって異なることから、2ゼミで40名弱にもなる学生に対して、共通した専門科目を教えることは難しい。そのため、ゼミ共通の編入学対策科目は、小論文対策として、論理的思考力の形成に注力することとした。一方で、専門知識の獲得については、マーケティング論や企業論等の講座を開設したり、指定図書を案内したりする等の方法で、指導を行っていくこととした。

(4) 他学科との連携

食物栄養学科と幼児保育学科はこれまで本学科と同様に学科ごとに独自の編入学対策を行っていた。そのため、各学科の取り組みや、他学科の学生の編入学先について共通で理解することが難しかった。

例えば、食物栄養学科の学生は多くが中村学園大学栄養科学部の編入学を目指す。一方で流通科学部を受験する学生もいる。その場合、専門科目の指導は専門科目の特性上、キャリア開発学科の教員が指導する方が効果的である。また、短期大学部内で編入学を希望する学生の情報交換をする場も必要である。

このような理由から編入学を支援する委員会が必要となり令和2年度から学科横断の編入学支援委員会を設置した。

さらに、短期大学全体での編入学の初めての取り組みとして表3のように志望大学調査、英語、小論文などの対策講座を令和2年度の夏期に集中講座として実施予定である。

² 編入学希望に関して、2020年度アンケートの「未定者」と2019年度のアンケートの「少し考えている」をほぼ同じレベル感として比較している。

表 3 編入学支援夏期集中講座の内容

講座	日にち	時限	講座名	内容	担当	受講対象
1	9/8 (火)	1限目	第1志望大学の調査	第1志望大学の調査およびその大学の志望実績などを調査し、今後どのように勉強していけばよいかなどを調べます。	キャリア開発学科 石橋 慶一	FHC
2	9/8 (火)	2限目	他大学の調査	他大学の調査およびその大学の志望実績などを調査し、今後どのように勉強していけばよいかなどを調べます。	キャリア開発学科 石橋 慶一	FHC
3	9/9 (水)	1限目	英語力アップ	「急がば回れEnglishプロジェクト」の解説をします。小テストで英語力の伸びを確認しましょう。	キャリア開発学科 岩田 京子	H1年生 編入学ゼミのみ
4	9/9 (水)	2限目	英語対策	編入試験における英語について理解します。英語は編入学試験や入学後の3年次以降の授業でも必要です。本講座では、英語をどのように勉強していけばよいか、特に編入学の対策方法について学ぶことができます。	キャリア開発学科 岩田 京子	FHC
5	9/10 (木)	1限目	小論文の基礎	ほとんどの編入学先の試験には小論文があります。小論文はある程度書き方を学ばないとしっかりした書き方はできません。本講座では、小論文の書き方の基本について学ぶことができます。	ラーニングサポート センター 渡邊 麗子	FHC
6	9/10 (木)	2限目	小論文演習	実際に小論文を書いてみます。	キャリア開発学科 石橋 慶一	FHC

4. 今後の取り組み

学校基本調査（文部科学省）によると、短期大学から大学（学部）への編入学は、平成30年度3,925人（男子1,325人、女子2,600人）、令和元年度3,621人（男子1,218人、女子2,403人）であった。短期大学入学者の約3%に当たる。小方・立石（2009）は編入学する学生を「マイナー・マージナルな学生」と表現している。数も少なく、「入学も卒業も同じ教育機関」が一般的な日本では、確かに周辺に位置する学生たちかもしれない。今後も編入学はマイナー・マージナルであり続けるのだろうか。それとも米国やEU諸国のように、多くの学生がさまざまな理由で、複数の高等教育機関を流動することになるのだろうか。

編入学の将来的動向はわからないが、少なくとも本学科では、令和2年度入学生の編入学希望者は例年より増加している。この学生たちをマイナーケースとして、個別指導で対応するだけで済ませていいものかという疑問が生じる。学生の卒業後のキャリア支援として、就職と並んで編入学を重要視するべき時ではないだろうか。そうした複線のキャリア選択の可能性が、短期大学の魅力と存在価値として社会への認知につながるとも考えられる。以上の課題意識から、本学科では編入学支援を本格化させることになった。

前章では本学科の現在の編入学支援の取り組みについて記述した。本章では、今後の取り組みとして（1）編入学の学習環境整備（2）組織的な編入学支援システム、そして（3）4年制大学との連携の3つの視点から編入学支援を考えていきたい。

(1) 編入学の学習環境整備

先に述べたように、令和2年度、短期大学部3学科が共用する「短期大学部編入学支援ルーム」（以下、編入学支援ルーム）が設置された。本学科ではこれまで、編入学希望者が少数であったこと、また編入学希望先が専ら中村学園大学流通科学部であったことなどから、入試前の短期間の指導で済んでいた。そのため、編入学という特定の目的のための物理的な場所を必要としてはこなかった。しかしながら、短期大学部として3学科で編入学を推進するためには、その「シンボル」としての編入学支援ルームは大きな意味をもつ。また、学生に対しても編入学の諸々の情報などを見ること・知ることができる場所ができたことは、支援の第一歩であると考えられる。

今後は編入学支援ルームが編入学の多機能キーステーションとなりうるよう展開する。まず学生にとっては、学習室、編入学情報の収集、カウンセリングルームの役割も果たす。そのため、編入学支援委員会の教員を中心に、今後も必要な資料の整理、学習に必要な蔵書や備品の設置を進めていく。スペースに制限があるため、多人数の一斉授業はできないが、ワークショップのような少人数の学習会なども企画する予定である。

現在、編入学支援ルームの管理は本学科が行っているが、常駐している教職員はいない。学生は質問や相談がある場合は、編入学支援委員の元に出向かなければならない。短時間で終わる質問であれば、非効率的である。常駐する適切な専門スタッフがいれば、学習支援、進路相談、教員との情報共有など効率的、かつ細やかな編入学支援が実現できる。編入学に関する人的配置が今後の課題となる。

(2) 組織的な編入学支援システム

立石（2008）は、編入学に関して短期大学卒業者は高専および専門学校修了者より受験可能な学部の比率が高いが、一方で「機会さえ用意すれば学生は編入する」という単純な構造の問題ではないという。小方・立石（2009）は、編入学する学生が少なく、データも蓄積され

てこなかったことが理由で、編入学についての研究が進んでこなかった背景を説明しながらも、508名の短期大学生と専門学校・各種学校在籍者を対象に、編入学を進路選択にとる規定要因を探った。①家庭背景、②学生本人、③高等教育機関という3領域に、高校在学時と短期高等教育機関在籍時という2時点において、編入学志望を規定する要因を明らかにしている。

①の家庭背景に関しては、編入学にプラスに働く要因として、周囲の人の賛成・支援、経済的な準備としている。編入学の志望者の父母ほど、子に大学への進学を期待している。親が強く望めば、子も志望する可能性が高いことを示している。

②の学生本人では、学力の高いもの、普通の学生生活の中で熱心に学習を行った学生が編入学をする傾向がある。一方、学力への不安、受験勉強時間の不足がマイナスの要因としてあげられる。進学先の短期大学が第一志望であれば、編入学を志望しなくなる。高校在学時の大学進学志望の有無が編入学の志望を強く規定している。入学後は学業が編入学の志望を左右する。

③高等教育機関の影響としては、編入学に関する支援の有無が影響する。補修や面接練習など、学校からの援助が編入先の大学のタイプを決める。「編入学制度に関する情報不足」「周囲の人の支援不足」が編入学のマイナスに影響する。

以上を簡単にまとめると、短期大学生が編入学を志望する可能性を高めるのは、「保護者が4年制大学に進学することを望んでいる」、「本人が高校在学時に大学進学希望であった」、「入学後も一定の学力と学業努力を維持している」、「短期大学で情報提供・補習・面接練習の実施があること」が、示唆されている。

これらの知見からも、編入学には短期大学での教育や編入学への支援（学生個々人の背景、学力の把握などの学生の理解と学習支援、編入学先の進路選択の情報提供、カウンセリングなど）が重要であることがわかる。こうした支援には本学科単体の取り組みだけでは限界があり、学科を超えた組織的な編入学支援システムの構築が必要である。

そのためには、前章で述べたように本年度の取り組みを深化させていくことに加えて、短期大学3学科間の連携、ラーニングサポートセンターおよび社会連携推進部との連携など学内での支援体制の強化・拡充も重要であ

る。今後は、他学科や関係部局との協力体制を作りたい。

(3) 4年制大学との連携

少し古いデータになるが、短期大学生の場合、系列大学への編入学が約3割にのぼる（吉川他、2004：15）。その理由を明らかにしていないが、系列大学への推薦制度、入学金や学費減免除等の支援、親近感などが考えられる。系列大学がある短期生が志望先大学として優先して考えるのは当然であろう。本学科にとって系列大学と言えるのは中村学園大学である。これまで本学科の卒業生たちは、中村学園大学流通科学部への推薦入試制度の利用が可能で、条件を満たした学生は推薦入試で、満たせなかった学生は一般入試で受験してきた。流通科学部からは、学内説明会や合格後のゼミナール決定にも一定のご厚意を頂いている。今後は、学生の学業状況の情報共有など連携が図れるような仕組み作りを行いたい。

編入学希望者が増えれば、従前のように、編入学先大学が中村学園大学流通科学部だけとはいかない。募集人数も限られているうえ、他短期大学や専門学校からのライバルとなる編入学希望者がいるからだ。流通科学部だけに強く依存することはできない。また、編入学を「キャリアチェンジ」の契機として、学生が新たな学問分野へ挑戦することもあるだろう（例えば、本学科から看護学部を希望するような場合）。多様な編入学先大学・学部が目配りをする必要がある。

編入学の課題のひとつに、認定単位の問題がある。各大学・学部により認定単位に関する規定が異なり、①個別認定方式（読み替え方式）、②包括認定方式、③個別認定と包括認定の併用方式がある（吉川他、2004）。編入学後にどれだけの修得単位を認められるかは大学（学部）により、また学生個々人によっても異なる。そのため、中には認定単位数が少なく、編入学後に多くの授業に出席して単位を修得しなければならないケースもある。編入学後の学生の負担を軽減する意味でも、編入学先大学の単位認定の情報収集は重要である。また、編入学先大学から既修単位として認定されるか、という視点で本学科のカリキュラムやシラバスを考える必要もあるだろう。

これまでの本学科では「編入学は流通科学部へ」で終わっていたが、今後は、学生の受験対象大学・学部の情報収集が可能となる「ゆるやかな連携」がとれる大学を増やすことが目標である。

5. おわりに

本学科では、増加する編入学希望者に対して、様々な支援の取り組みを行おうとしている。ハード面やソフト面など考慮し、整備しなければならない点が多い。また、短期大学や専門学校のかなかで、先駆的に編入学で実績を上げているところがあるので、それらの学校を参考に後発ながら充実した本学科独自の編入学支援システムを構築していかなければならない。

今後は(1)編入学の学習環境整備(2)組織的な編入学支援システム、そして(3)4年制大学との連携といった視点に立ち、課題を解決していく必要がある。さらに、今後、編入学希望者が増えたり、志望分野が多岐になったりした場合、本学科教員だけの支援では限界がある。短期大学部の他の2学科、連携推進部、ラーニングサポートセンターなどとの組織間連携が重要となってくる。学科、事務局問わず短期大学部を挙げ編入学を支援しなければ成功できないだろう。

入学者数の減少に歯止めはかからず、短期大学は今まさに岐路に立っている。編入学のシステムをしっかりと構築することもまた、学生の多様性に対応した進路保障のひとつであり、4年制大学にはない短期大学の魅力となるよう、今後とも強く推進していく必要がある。

謝辞

本報告は、令和2年度中村学園大学・中村学園大学短期大学部「教育改革支援制度」採択「短期大学部における編入学支援システムの構築に関する取り組み」(申請代表者:石橋慶一)の研究成果の一部である。

参考・引用文献

- 小方直幸・立石慎治(2009)「編入学の選択構造に関する考察」『広島大学大学院教育学研究科紀要』第三部、第58号、293-300
- 立石慎治(2008)「高等教育機関を移動する学生—受験機会と入学実態—」『大学評価・学位研究』第7号、19-32
- 立石慎治(2009)「編入学制度が学生にもたらすインパクト」『高等教育研究』第12集、215-236
- 文部科学省(2019)「令和元年度学校基本調査(確定値)の公表について」(令和元年12月25日)
https://www.mext.go.jp/content/20191220-mxt_chousa01-000003400_1.pdf (令和2年8月17日確認)
- 吉川裕美子・濱中義隆・林未央・小林雅之(2004)「学生の流動化と学士過程教育—全国大学調査にみる編入学、単位認定、学生交流と支援体制の実態—」『学位研究』第18号、3-104